東京外国語大学

# 校舎移転の歴史

アジア・アフリカ諸文化研究所から見たキャンパス


**東京外国語大学文書館**

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟600号室

TEL. 042-330-5842

e-mail：tufsarchives@tufs.ac.jp

http://www.tufs.ac.jp/common/archives/



東京外国語大学文書館

# 東京外国語大学の校舎移転図

**東京外国語大学は現在の府中キャンパスに至るまで、統廃合・火災・震災や戦災によって、たびたび校舎移転を余儀なくされてきました。**

### 《年表/校舎の移転順》

❶神田区一ツ橋通町1番地（現、千代田区一ツ橋2丁目）：1873年建学。
❷神田区錦町3丁目14番地（現、千代田区神田錦町3丁目）：1901年校舎新築。1913年2月神田大火災により焼失。
❸神田区錦町3丁目13番地（同上）：1913年仮校舎建設。
❹麹町区元衛町1番地（現、千代田区大手町1丁目）：1921年新校舎建設。1923年9月関東大震災により全壊。
❺市ヶ谷陸軍士官学校を間借。
❻麹町区竹平町1番地（現、千代田区一ツ橋1丁目）：1924年文部省跡地に新築仮校舎建設。
❼滝野川区西ヶ原町（現、北区西ヶ原）：1933年移転地に決定。1944年移転、1945年4月城北大空襲により焼失。
❽上野の東京美術学校の校舎一部を間借り。
❾板橋区上石神井：智山中学校校舎と元電波兵器技術専修学校の木造校舎を借用。
❿北区西ヶ原：1949年戦災復興校舎が建設。キャンパスの増改築が進められる。
⓫府中市朝日町：2000年に新キャンパス建設。

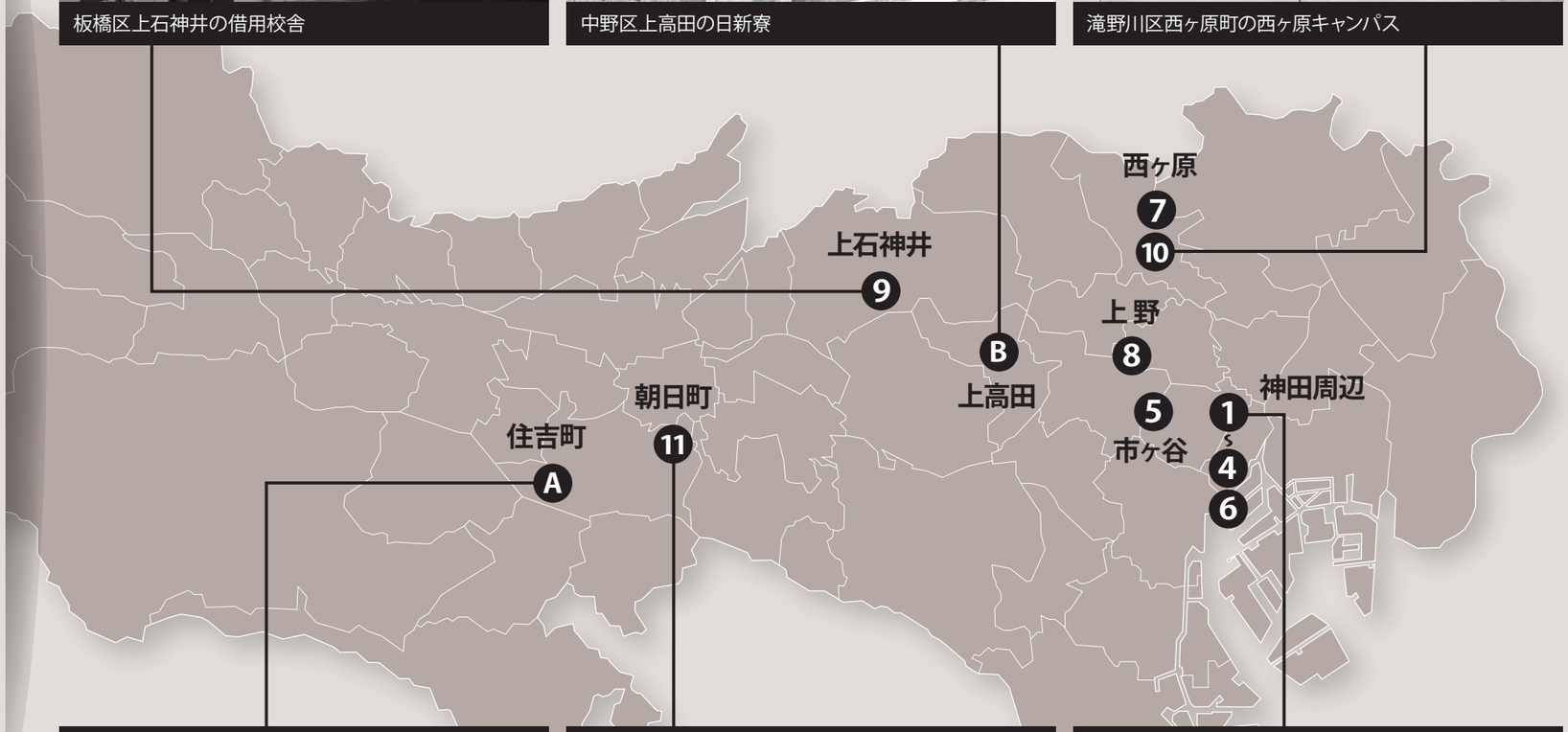
Ⓐ附属日本語学校（府中市住吉町）：1970年設立、2000年に府中キャンパスに移転。

Ⓑ日新寮：1924年豊多摩郡野方村大字上高田字新井前114番地に学寮として設立。1977年廃寮。

板橋区上石神井の借用校舎

中野区上高田の日新寮

滝野川区西ヶ原町の西ヶ原キャンパス



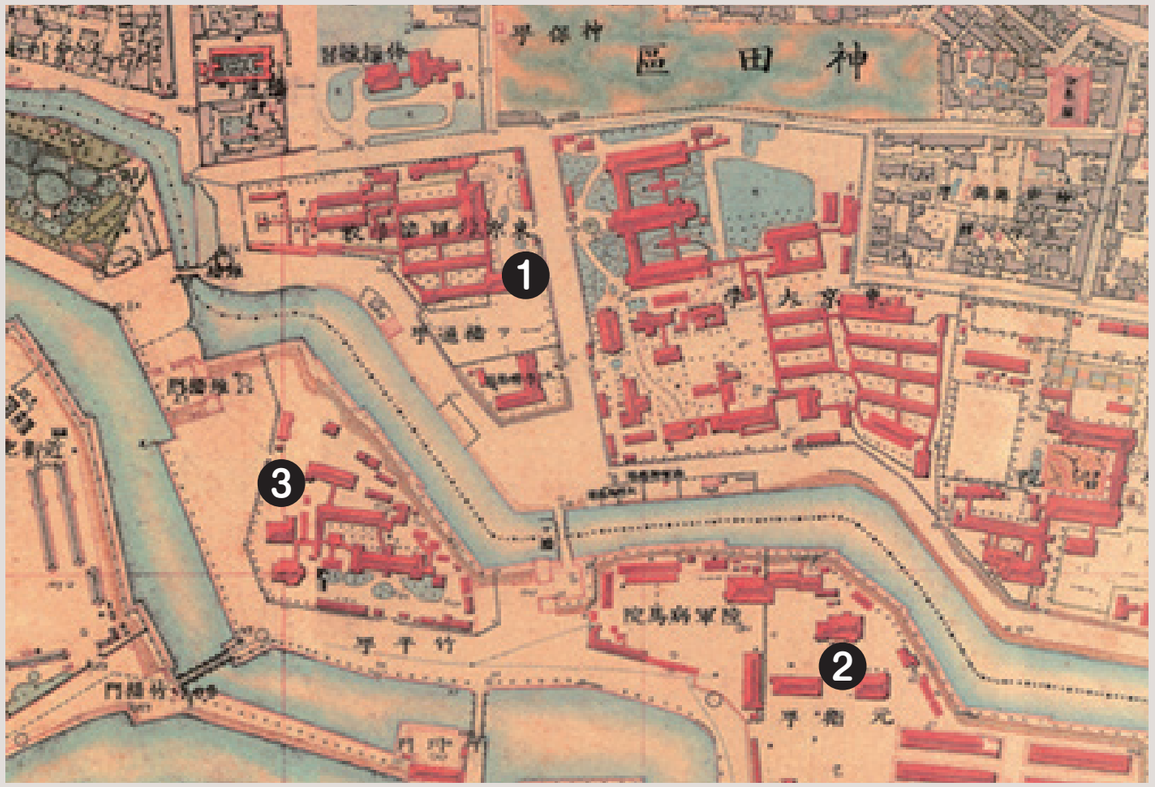

府中市住吉町の附属日本語学校

府中市朝日町の府中キャンパス

一ツ橋通町の校舎

# 皇居周辺における校舎移転

**東京外国語大学の前身、東京外国語学校は、1873年の建学以来、第二次世界大戦中の1944年まで、皇居北側の地で、火災や震災により移転を重ねました。**




**【1883年頃の東京神田一ツ橋通町周辺図（上図）】**
現在、東京外国語学校跡地には除水会館(一橋大学)や共立女子大学、東京大学跡地には学士会館が建設されています。上図番号は校舎説明の番号と一致。

### ❷ 麹町区元衛町1番地
（6・7頁参照）

### ❸ 麹町区竹平町1番地
（8・9頁参照）

### 1913～1921年仮校舎時代 神田錦朝3丁目13番地校舎

### ❶ 神田一ツ橋通町

1873年11月4日-1885年9月21日

1873年(明治6)、官立の外国語学校として建学された東京外國語學校は、開成学校の語学生徒を中核とし、校舎もまた元開成学校の跡地である神田一ツ橋通町の校舎を引き継ぎました。校舎は、当初より老朽化が進んでおり、1878年には教場の「頽敗(たいはい)」を理由に改修工事が行われました。

1885年、富国強兵・殖産興業が推進される中、「語学ハ商業ニ附属」する学問とみなされ、東京商業学校(現一橋大学)に統合されます。合併後の校舎は外語の跡地が利用されました。

### 神田錦町3丁目14番地

1899年9月11日-1903年1月

日清戦争後、海外事情に通じる専門家の養成が急務となり、高等商業学校附属外国語学校が創立されます。1897年(明治30)9月、附属外国語学校は高等商業学校の商品陳列所を改造した木造2階建の校舎を本拠に開校されました。2年後に高等商業学校から独立した東京外国語学校は、商業学校の運動場の施設を改築し、神田錦町3丁目14番地に校舎を移します。

わずか6つの教室しかなかった木造2階建の校舎では手狭であり、従来の高等商業学校の校舎をそのまま分校場として活用することで、学生への教授に応じていました。

### 神田錦町3丁目13番地

1903年1月-1921年4月10日　**※1913年9月以降仮校舎**

1903年(明治36)1月、神田錦町3丁目13番地に校舎を新築し移転します。これにより、独立以来の最大の懸案事項であった校舎・設備問題が大きく改善されました。同年の日本帝国文部省年報では「設備ニ関シテハ本年度中校舎ヲ増設シタル以テ教授上ノ便益ヲ得ルコト少シトセス」と校舎の充実ぶりが指摘されています。

しかし、日露戦争以降の外國語の需要増大を受け、1911年に蒙古・暹羅・馬来・ヒンドスタニー・タミルの5学科が設置されると、生徒数の増大に伴い校舎問題が再燃します。

## コラム COLUMN 「神田大火災」

1913年(大正2)2月20日未明、神田三崎町より出火した火災は、「雨の如き火の粉」をまき散らかしながら、神田一帯を焼け野原にしました。神田錦町方面は特に火の勢いが強く、わずか正門・門衛・便所を残し校舎(本校・分校)は全焼しました。

神田大火災後の急場をしのぐため、東京外國語學校は校舎を文部省内の修文館に移し、加えて高等商業学校分教場に分教室を設置しました。同年9月5日、神田区錦町3丁目の本校敷地に仮校舎を建設しました。

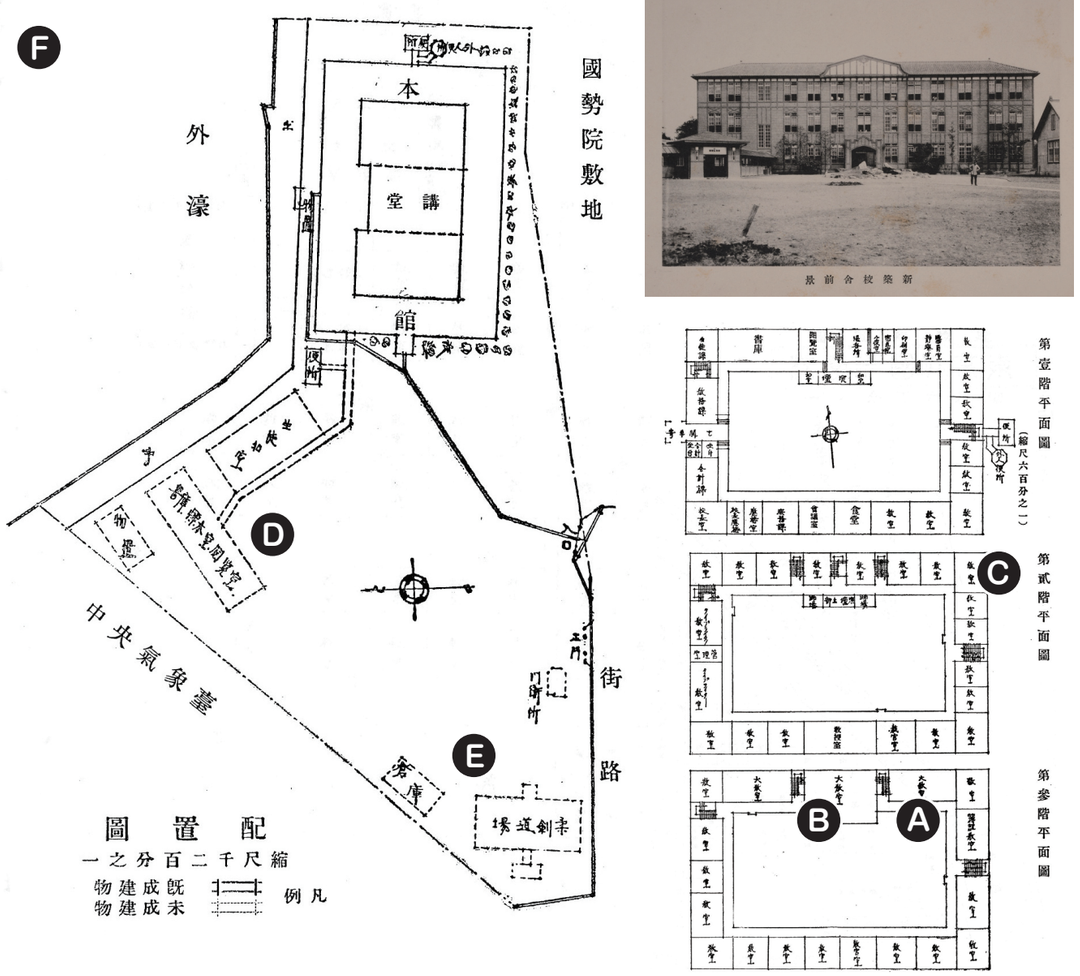
約8年後の1921年に麹町区元衛町の新校舎に移転するまで仮校舎の時代が続きます。

「外國語學校の焼残つた金庫」(「東京朝日新聞」大正2年2月21日)

# 元衛町校舎 1921年4月-1923年9月

1921年(大正10)、麹町区元衛町に新校舎が建設されました。神田大火災による校舎焼失から8年を要した背景には、その間に起こった「校名存続」・「修業年限延長」を中心とする教育体制の変革の議論と、校舎建設が結び付けられたためでした。

新校舎本館はロの字型をした3階建であり、教室は拡張され数も2倍に増えました。また翌22年には講堂・生徒控所・柔剣道場・図書館も設置され、施設の整備が進められました。しかし、わずか2年後の1923年9月1日午前11時58分、相模湾沖で発生した関東大震災は東京中に被害を及ぼし、元衛町の新校舎は倒壊してしまいます。

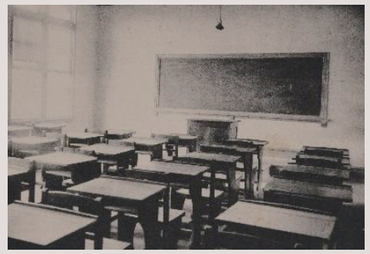



【元衛町校舎図面(1/2000)】三階建の校舎に大小様々な教室が配置されています。

A 授業室の大教室(校舎1階)

B 講堂(校舎1階)

C 教室(校舎1階～3階)



D 生徒控室及建築中図書館(左)

E 校舎三階から見た テニスコート・道場・正門

F 外堀から見た校舎

『大阪朝日新聞』大正12年9月5日

授業開始の通知『東京朝日新聞』大正12年9月22日

## コラム COLUMN 「関東大震災」

### 関東大震災と外国語学校生の声

1923年(大正12年)9月1日午前11時58分、関東大震災が発生しました。この地震に伴う大火は東京中に拡がり、東京外国語学校の校舎も焼失します。

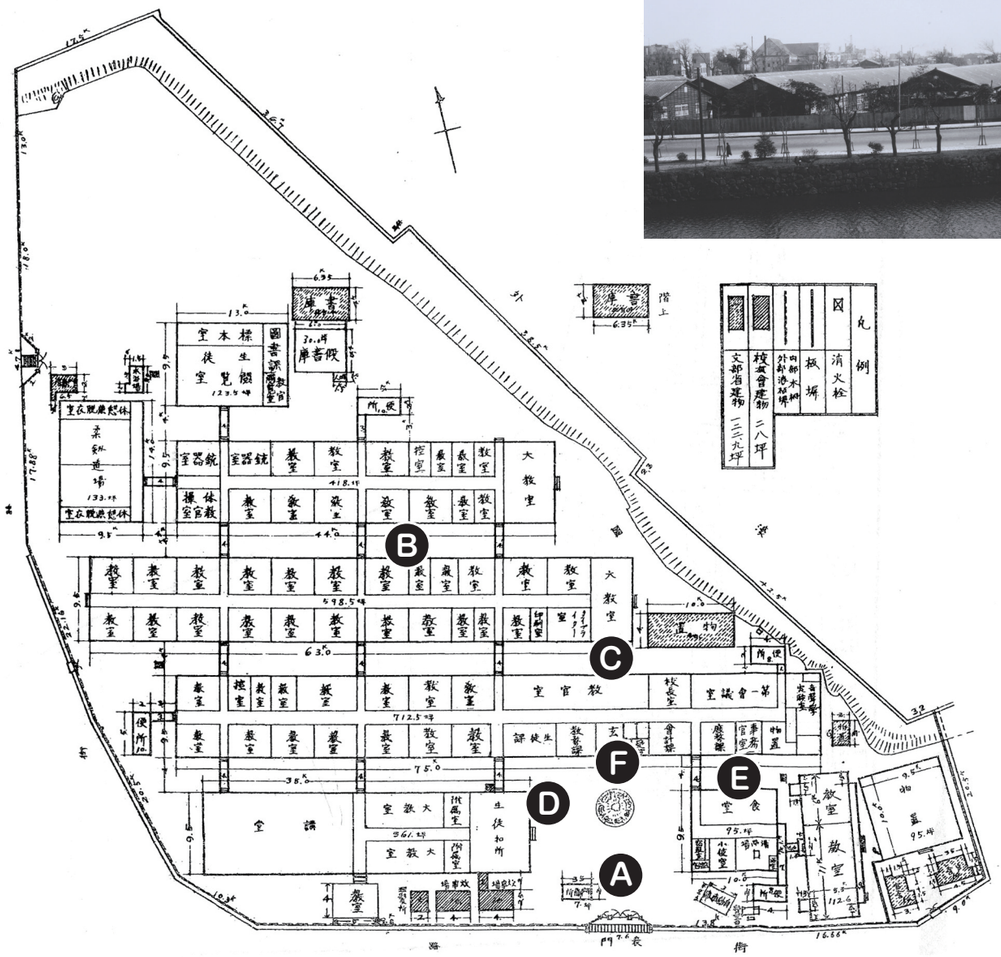
「三日の朝始めて学校に来て見たがなるほど図書館の外郭と道場を除いて本校舎は悉皆焼けて了まつてゐた。会計の吉村さんや二三の事務員の人達は真黒になつて後片付けをしてゐられた。この時校長も来てゐられたので飛んでもないことになりましたねと御挨拶申し上げた、校長もいかにも緊張した顔付で焼け落ちる当時の模様を話して下さつた。流石に校長は責任感の強い人であると私は自身の身に引き較べて深く感動した。(吉田旺夫「震災当時の記憶から」『仏友会雑誌』(大正13年2月29日、第5号))

「さはれ、この大天に、あの濠端に堂々と立つ三層楼の外語の新築校舎も九月二日午前八時遂に灰と化し、其の中に育くまるゝ六百有余の学生は、こゝに校舎を失ひ、東京市殆んど全滅のため、住むに家なく、国あるものは故郷へかへり、都に住む者は、右往左往、住所は勿論のこと、其生死さへも全く不明と言ふ悲しむべき状態に陥つたのである焼失後の学校当局は、後の整理にて、殆んど罹災学生を顧りみる事も出来なかつた。(永井五男「雑報震災記事」『ゲルマアニア』(大正13年12月18日))

# 竹平町校舎 1924年3月-1944年5月

関東大震災から2か月後の1923年(大正12)11月1日、牛込区市ヶ谷の陸軍士官學校を間借し授業が再開され、翌年3月には旧文部省跡地の麹町区竹平町１番地に仮校舎が建設されます。当初夏休みまでの五ヶ月間の一時校舎を予定していましたが、移転先の選定に難航し、1944年までの約20年間仮校舎で過ごすことになります。

仮校舎は震災復旧の木造平屋の安普請で、天井板は剥がれ、外壁は落ち、雨漏りなども頻発していました。そのため、生徒からは「鶏小屋」のあだ名が付けられ、受験生は校舎を見るとがっかりしたそうです。




【竹平町校舎図面（1/800）】平屋建ての校舎の間には中庭が広がり、授業中に教室の窓から中庭へと抜け出す学生もいたそうです。

A 正門

B 教室

C 教官室

D 生徒控室掲示板

E 食堂

F 下駄箱

## コラム COLUMN 「竹平町周辺と戦前の西ヶ原校舎」

竹平町は学生の街 神田に程近く、学生は散歩を兼ね古本屋街に通いました。東京市中には市電網が敷かれ、学生にとって重要な移動手段となっていました。春の学内競漕大会の時期には多くの学生が練習のため、市電と渡し船で神田から向島の艇庫まで通いました（左下・中央写真）。

1923年(大正12)の関東大震災により校舎を失った東京外国語学校は、移転先の選定に難航します。1933年(昭和8)移転先として確保された用地が、滝野川区西ヶ原町にあった海軍爆薬部の跡地でした。翌年、大蔵省よりこの地の引継ぎを受けますが、不況のあおりを受け、新校舎の建設は遅れ、当初設置されたのは校門と敷地を囲む塀のみで、長らくグラウンドとして利用されていました（右下写真）。

# 西ヶ原キャンパス

**滝野川区西ヶ原町** 1944年5月31日-1945年4月13日
**北区西ヶ原** 1949年3月23日-2000年8月11日

## ■ 戦前の西ヶ原校舎と戦後の西ヶ原キャンパスの再建

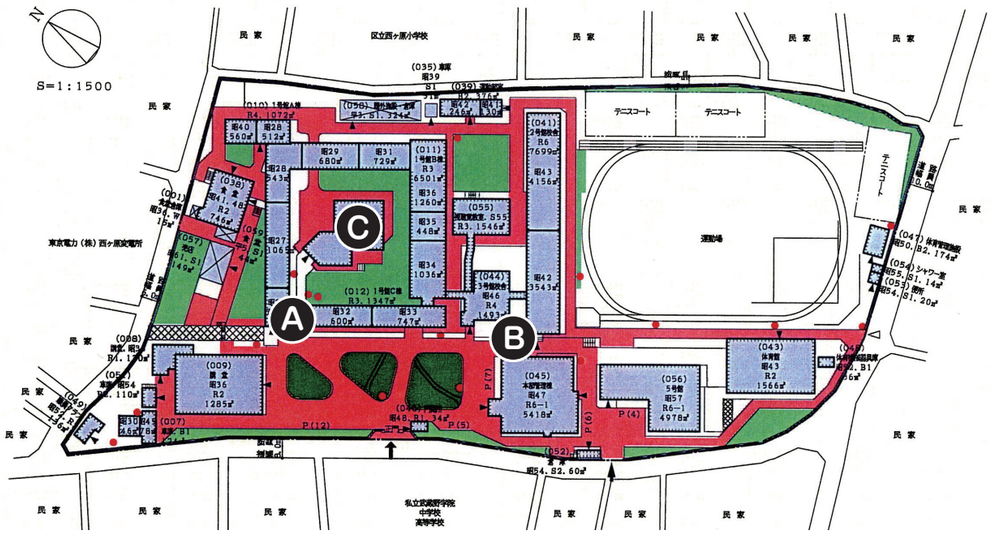
1940年1月校舎建設に着工し、1944年に空襲からの疎開を兼ねて竹平町校舎から西ヶ原新校舎に移転します。しかし、翌年4月13日、東京西北部一帯を襲った城北大空襲により、わずか1年を待たず焼失してしまいます。

そのため、東京外事専門学校（東京外国語学校が改称）は、戦後上野の東京技術学校の一部等を間借りして終戦を迎えます。次いで、板橋区上石神井の智山中学校と元電波兵器技術専修学校の木造校舎を借用し授業を再開します。1949年(昭和24)3月23日、新制大学発足直前に西ヶ原キャンパスに戦災復興校舎が建設され、1951年に新キャンパスへの移転が完了します。

西ヶ原キャンパスでは、1952年に鉄筋コンクリート校舎の新築が始まり、1950年代に従来の木造校舎から鉄筋コンクリート造校舎への移行が進みます。1960年代、学内では学科の増設、海外事情研究所やアジア・アフリカ言語文化研究所の設置も行われ、設備の充実化が図られました。

上石神井の仮校舎

戦災復旧校舎



【西ヶ原キャンパス図面（1/1500）】図中の「昭47」は「昭和47年」に建設されたことを示しており、増改築の様子が確認できます。

**A**
**《1号館》**

1953年頃

2000年頃

60周年記念講堂（奥が1号館）

**B**
**《木造の戦災復旧校舎》**

1949年頃

1972年度

新築の4号館（木造校舎の跡地に建設）

**C**
**《中庭》**

1959年頃

1979年度

中庭に新設された図書館

### コラム COLUMN
## 「俯瞰図で見る西ヶ原キャンパスの増改築」

西ヶ原キャンパスは語学科や大学院の設置に伴い、増改築を繰り返します。俯瞰図からは、建物の増改築の様子が確認できます。

**1961年（昭和36）一号館・講堂**
1964年（昭和39）AA研
1966年（昭和41）大学院（外国語学）設置
**1967年（昭和42）二号館**
**1968年（昭和43）体育館**
1968年（昭和43）学園紛争・キャンパス閉鎖
**1971年（昭和46）三号館**
**1972年（昭和47）四号館、保健管理センター**
1975年（昭和50）大学院（日本語学）設置
1977年（昭和52）大学院（地域）設置
**1979年（昭和54）図書館新館・LL**
**1982年（昭和57）五号館**
**1985年（昭和60）国際交流会館**

左に1号館と右に戦災復旧校舎

2号館・3号館・4号館の建設後

### コラム COLUMN
## 「健ちゃん食堂」

東京外国語大学には「健ちゃん食堂」と呼ばれ、学生たちに親しまれた食堂がありました。正式名称は「常盤食堂」といい、経営者の小川健三氏の名前にちなんで、「健ちゃん食堂」と呼ばれていました。東京外國語学校の時代(竹平町)から学内にあり、戦中・戦後の厳しい食糧難の時代に学生に食べ物を供給しました。しかし、1959(昭和34)学内に生活協同組合が誕生したことを受け、学内2つの食堂を設置することが困難となり、学外に出ることとなりました。

# キャンパス移転の議論

西ヶ原キャンパスの敷地は、戦後からその狭隘さが問題となっていました。学生数の増加を受け、増改築が繰り返されましたが、校地面積に限りがあり、早くから移転が検討されてきました。

1962年、政府が大学や研究機関を集めた「研究学園都市構想」の計画を発表すると、東京教育大学とほぼ同時期に東京外国語大学もまた筑波移転を検討します。結果的に移転は断念されますが、移転地の確保は歴代学長の一番の課題となり続けます。また大学の設置については、1959年の工場等制限法により都市部での新設・増設が規制されます。1984年には大学設置審議会大学設置計画分科会において「昭和六十一年度以降の高等教育の計画的整備について」が示され、都市部への大学の集中が抑制され、キャンパスの増設を目指す大学の郊外移転が進みます。

1985年（昭和60）7月、文部省より府中地区旧関東村跡地への移転が打診されると、同年10月教授会において移転希望の賛否が審議されます。賛否投票の結果、賛成60、反対13、白票19、無効1となり移転希望の方針が決定され、翌月、評議会において移転希望が表明されました。これを受け、以下の3条件を軸に文部省との交渉が進められます。

学内には学長の諮問機関として移転問題検討委員会・施設計画委員会・教育研究組織検討委員会が設置され、移転と並行して、今後の教育・研究の在り方が検討されます。こうした検討結果は、長幸男学長のもと1988年『移転統合の基本構想』がまとめられます。

【1997年頃西ヶ原キャンパス俯瞰図】



## 《 資料紹介 》

『移転統合の基本構想』では、「現在のキャンパスは、そのあまりにも狭隘なスペースという点においても、諸種の環境条件においても、本学が求めるべき教育・研究施設として不十分であり」、「本学の将来を展望するとき、現在のキャンパスにおいては、今日の地球大に拡大した国際化・情報化時代に対応すべき外国語教育の改善、教育対象言語圏の拡大、国際社会の多様な発展に対応すべき地域研究諸部門の拡充、近年諸方面から要請の強い留学生の受け入れ増進や国際学術交流の促進などはほとんど不可能であり、本学が求めるべき大学院、研究所の増設や将来構想され得る学部・学科の新設ないしは改編も不可能である」として、移転統合は本学の将来構想と併せて検討が進められていきます。

## 《 移転の議論年表 》

| | |
|---|---|
| 1985年11月6日 | 評議会において、移転希望を表明。 |
| 1986年2月10日 | 文部省の「国立学校の統合整備等に関する連絡調整会議」において、本学の移転について協議の上、了承。 |
| 1988年7月19日 | 「国の行政機関等の移転について」において、本学が首都機能移転の対象となる行政機関のひとつとして閣議決定。 |
| 1989年8月24日 | 「国の機関等移転推進連絡会議」において、本学の移転先を東京都府中市に決定される。 |
| 1993年6月24日 | 「国の機関等移転推進連絡会議」において、本学の移転場所を東京都府中市(旧米軍)関東村住宅地区跡地に決定。 |
| 1994年6月21日 | 「国有財産中央審議会」において、関東村住宅地区返還国有地処理大綱を審議の上、新キャンパスの位置、面積(13ヘクタール)等が大臣に答申される。 |
| 1996年8月18日 | 文部省の「国立学校の統合整備等に関する連絡調整会議」において、新キャンパス建設について平成9年度工事着工が決定。 |
| 1996年8月21日 | 文部省の「国立学校施設計画調整会議」において、新キャンパス基本設計が了承。 |
| 1996年11月6日 | 評議会において、新キャンパス研究講義棟の基本設計を承認。 |
| 1997年2月18日 | 「国有財産関東地方審議会」において、関東村住宅地区返還国有地の一部を新キャンパス用地として本学に所管換することについて答申。 |
| 9月26日 | 新キャンパス起工式を行い、工事に着手。 |
| 2000年8月11日 | 府中キャンパス移転。 |
| 2000年9月27日 | 府中新キャンパス・オープニング・セレモニー挙行、より |
| 10月2日 | 新キャンパスにて授業開始。 |
| 2002年2月1日 | アジア・アフリカ言語文化研究所が府中キャンパス移転。 |
| 2004年2月23日 | 留学生日本語教育センターが府中キャンパス移転。 |

## コラム COLUMN
### 「移転の障壁!? 騒音問題」

本学の移転決定時点において調布飛行場は移転することとなっていました。しかし、飛行場の残留が決定すると、急遽航空機の騒音が懸案事項に浮上します。そこで「本学の使命であり、根幹である語学教育に多大な影響を及ぼすことになりかねない」として、その実態調査が進められることになりました。結果として、本学に影響を及ぼす騒音が発生しないことが明らかとなりますが、移転上の課題の一つとなりました。

## コラム COLUMN
### 「移転地となった関東村跡地（現府中キャンパス）」

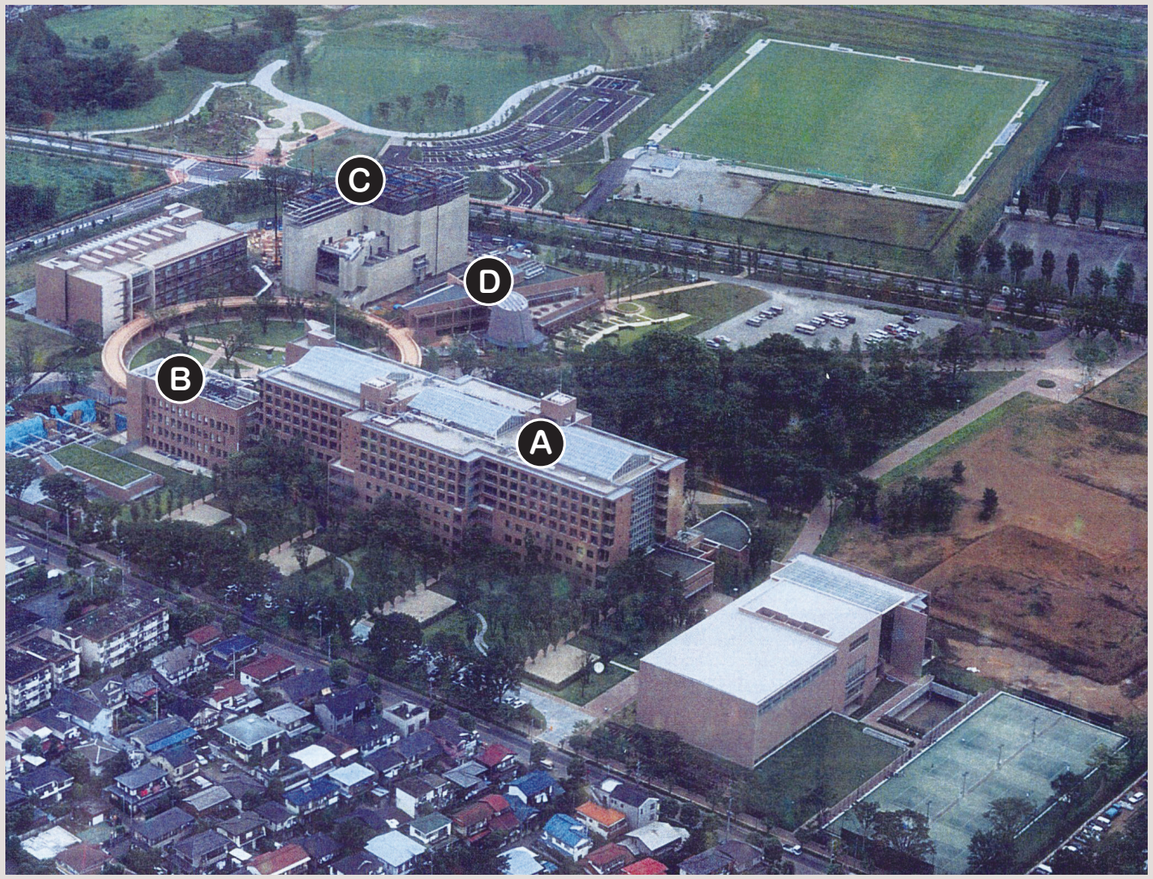
関東村跡地は、現在の府中市朝日町3丁目と調布市、三鷹市にまたがる土地で、1941年(昭和16)に調布飛行場建設のために切り開かれました。戦後、調布飛行場は米軍に接収され、1946年に調布水耕農園及び補助飛行場として使用され、一1963年からはワシントン・ハイツ(代々木)の代替地として米軍人とその家族らが居住する関東村住宅地区として利用されました。1974年、関東村住宅地区は米軍から国へ正式に全面返還され、跡地の利用が検討されます。

# 府中キャンパス　2000年8月-

1994年（平成6）、国有財産中央審議会において新キャンパスの位置・面積が決まると、本学でも将来計画検討委員会において移転を含む将来計画の検討が本格的に再開されます。キャンパス設計の基本理念には「対話を核として世界に開かれたキャンパス」が掲げられ、本学の教育研究に不可欠な「学内外との幅広い対話」、「時間と空間を超えた対話」を可能とする施設づくりが目指されます。その後、1996年文部省により新キャンパス基本設計が承認され、翌年9月26日に新キャンパス起工式が催され、工事に着手します。

2000年研究講義棟、附属図書館、大学会館が完成し、同年8月11日に府中キャンパスへの移転が達成されます。9月27日に挙行された府中新キャンパス・オープニング・セレモニーにおいて、中嶋嶺雄学長（当時）は「本学は、永年の懸案であり、また悲願であった新キャンパスへの移転統合を実現しつつあるので、教職員、学生諸君はもとより、同窓生や本学関係者のすべてが喜びを分かち合っております」と述べています。同年10月2日、新キャンパスにて授業が開始されました。

その後、2002年にはアジア・アフリカ言語文化研究所が、2004年には留学生日本語教育センターが移転し、全学の統合移転が達成されます。



【2001年6月19日府中キャンパス俯瞰図】

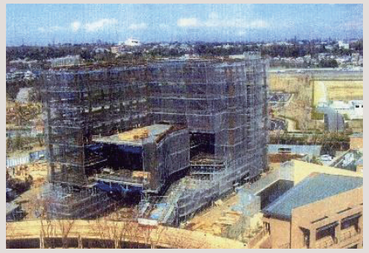
Ⓐ 研究講義棟（建設中）

Ⓐ 研究講義棟（建設中）

Ⓐ 研究講義棟（現在）

Ⓑ 本部管理棟

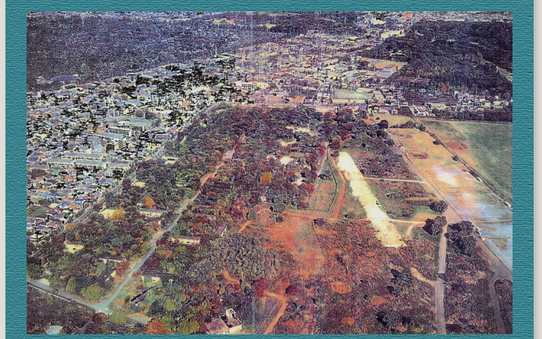
Ⓒ アジア・アフリカ言語文化研究所



Ⓓ 大学会館

【1999年10月28日俯瞰図】

【2000年7月1日俯瞰図】

## コラム COLUMN
## 「新キャンパス活用された樹木」

施設整備計画のなかでは「人と建物と自然が調和するとともに地域と融合した魅力ある景観を形成するために、既存の緑の有効活用に加えて施設内外の空間の連続性に配慮し、ゆとりと潤いある緑豊かなキャンパスづくりをする」ことが掲げられました。具体的には、キャンパス建設地に従来からある樹木全ての調査が実施され、樹形のよいものを移植して活用することで、「武蔵野の面影」を残しています。